はじめに

トブコトデハナイ、タツコトニ、オマエハシンソコキョウガクシタノデハナカッタカ、……＝跳ぶor飛ぶことではなく、立つこと（顕つ、建つ、起つ、絶つ、……）に、お前は、心底、……畏(オソ)れを、覚えていたのではなかったか、……。そうだった、……大地踏(ダイチフ)みの血(チ)の虹(ニジ)が立ったのだ。その未開の地の咽喉の下の呼(コ)ー吸(キュ)を濁(ミダ)す。さらに、……。

2018.4.1 Tokio gozo y.

目次

はじめに

序章　一九六八年と「肉体の叛乱」
「舞踏」という隕石――森下隆さんとの対話　6

第一章　土方巽
貝殻追放――飯島耕一風に　38
廃星は淋しさに宿る――土方巽氏に　45
ちいさな廃星、昔恒星が一つ来て、幽かに〝御晩です〟と
　語り初めて、消えた――新版（盤）を聞いて　49
土方巽／遠さ　55
燔犠大踏鑑（はんぎだいとうかん）　69
航海日誌　1970～1972　75
人間追跡――土方巽　86
踊る土方巽　87

第二章　笠井叡
さあ、これから、もっと、これから――笠井叡氏に、 94
震災と表現――3・11とは呼びえない事態をめぐって 98
踊る笠井叡 122

第三章　舞踏家たち
中嶋夏に（中嶋夏） 130
人形劇精霊棚（中嶋夏） 131
ムッシュー古釘（室伏鴻） 137
京都のふかさがわかりはじめていた（大須賀勇） 143
拈花瞬目（雪雄子） 150
土方巽、大野慶人の師（及川廣信） 156
イシカリノカ――慶人と *gozo*（大野慶人） 161

第四章　大野一雄
薄いヴェールの丘に 174
月暈／不死　01 176
ミルク（彌勒、……）の耳の手／O氏の舞踊 180

『死海』の水　182
踊る／身体の声／大野一雄さんと話す日　212
釧路湿原と舞踏と詩　236
母の海から　247
生と死の舞踏〈石狩―カムチャツカ〉　254
火炉の傍（かたわ）らに立つこの巨人　262
踊る大野一雄　291
大野一雄の踊る手　298

終章

吉増剛造舞踏関連年譜　302
初出一覧　317
おわりに

序章　一九六八年と「肉体の叛乱」

「舞踏」という隕石——森下隆さんとの対話

『肉体の叛乱』の時代

森下隆　二〇一八年の土方巽の命日の慶應義塾大学で行うイベントには、美術家の中村宏さんに来ていただき、一九六八年の土方巽の舞台『土方巽と日本人—肉体の叛乱』についてお話しいただきます。中村さんは、この舞台を八ミリで撮影しているんです。吉増さんもごらんになったこの舞台から話を進めたいですね。おそらくこの一九六八年という年がすごく象徴的なのだと思います。われわれと少し上の世代が、もう一度そのころを見直そうとしている。自分たちの七〇年代の活動を取り返したいということもある。また、いまの若い人にも、「六八年って何だろう」という問いかけがある。こういうなかで、二〇一七年から二〇一八年に『肉体の叛乱』が語られる予定です。二〇一八年は一九六八年からちょうど半世紀です。

まず『肉体の叛乱』というのはなんだろうということですね。七〇年安保に向けた政治的な背景もあるなかでの『肉体の叛乱』を現在、紹介する。そして土方巽がどういうふうに見られるかということ。『肉体の叛乱』そのものは土方巽にとって失敗作だと私は思いますが、これがなければ先にいけなかった重要な作品です。その時代に吉増さんが詩人としてどうお考えになっていたかを、ぜひうかがいたい。

吉増剛造　『肉体の叛乱』の会場は日本青年館でしたが、一九六八年の何月でしたか。

森下　十月です。

吉増　舞踏を見た経験というのは、その行われた場所への道筋と吹く風のようなものまで覚えているものですが、語れないけれども身体と精神のワンセットの経験として、……それは非常に苛烈なものでした。あのとき地下鉄外苑前の駅から、長い坂道でした日本青年館の玄関のところにまで歩いていった。後ろからぼくを追い越していきそうになった若い女の子と、連れ立って、しゃべりながら歩いていったのです。その女の子はどこかの映画雑誌の編集の手伝いをしていた。その女の子と話しながら、女の子も不安だったんでしょうね。編集長から切符をさずけられて、「わたしも見に行くんです」って不安そうにわたくしに話しかけたのですね。

その空気と一緒に、馬がつながれている日本青年館玄関の異様な光景にさしかかった。一九六八年の秋の入口の空気で、その入口は、いままさに森下さんが、「失敗作であった」とはっきりおっしゃったとおり、舞踏や舞台というよりも、ある種の出来事性として、……あるいは世界の図柄というか世界の形姿の変化が、……途方もないものでした。そのなかで最後に劇場の天井に吊り上げられていった、土方さんの姿をよく覚えています。

しかしながら、いまそれを思い出して、道筋まで思い出して反芻していくと、その都市の一角が崩れて燃えていくような、その出来事性と世界の図柄の変貌に非常な衝撃を受けていたことが判ります。その女の子にそのあと連絡をとって、ぼくもまだ二十代の後半ですからね、その子とデートしたようなことまでありました。そうした、出来事というよりもね、もっと深い心身の情動を引き出すような特別なときだったのです。おそらくその同じ年だと思います。笠井叡さんの『稚児之草子（ちごのそうし）』、あれがやはり一九六八年の

何月でしたか。

司会　一九六八年八月です。

吉増　えっ、……。そうすると非常に微妙な話になるのですけれども、わたくしがあとから、ある種の爆発的な都市の一角が崩れるような、燃えるようなそうした力動の図柄を都市の一角に感じた、『肉体の叛乱』のひと月前に、ぼくの記憶の中ではひと月後に、次のような記憶があったのです。ぼく自身の記憶のずれと、さらに、どうして、わたくしの記憶もまたずれて崩れていたのか、……それも一緒に考えていきたいと思いますが、……笠井叡さんの『稚児之草子』、例のワーグナーがかかって虎の絵があった、とんでもないあの舞台ね。厚生年金会館小ホールまで歩いた、新宿の裏道の細道を、ぼくはとってもよく覚えているのですよ。

そのときもどうしてか知らないけれども、ぼくはそのとき『三彩』（美術誌）の編集者だったのですが、近くの画廊の女の子（I・Yさん）を誘って、この二つはそういうエロスと一緒なんですね、ここにも、ある秘密があるのね、……女の子と一緒に歩いていっているんです。それで、厚生年金への裏道を歩いているときに、なんと、ぼくから二、三メートル前を着流しを着た土方巽が歩いていた、……。その歩いていく姿は、細い道の左側の路肩にへばりつくようにしていくような、そんな土方巽の姿を視界に入れながら、厚生年金小ホールに行っています。

そのとき、厚生年金小ホールのほうが日本青年館よりもキラキラした劇場ですからね、瀧口修造さんはいらっしゃる、三島由紀夫さんはいらっしゃってる、そばに富岡多恵子さんもいる。そういう人たちが並んでいる、……。しかも、舞踏もとにかく突き抜けるような、「こんな身体、ありえたか」というような、

笠井叡の、おそらく畢生の天性が、爆発した舞台でした。

したがって、その印象とともに、土方巽さんの日本青年館、いま森下さんがおっしゃったような、おそらく心身の燃えるような都市とともに、瓦礫がごろっと転がったような、あの出来事よりも、ぼくは、どうしてか、笠井叡氏の厚生年金小ホールを二カ月か後だというふうに覚えてしまっている、……そう覚えたらしいのです。なぜそう覚えたのか、……、おそらくそうした華やかな、そのとんでもない舞踏のスターが飛び出したことに対して、同じ表現者として、裏道を着流しを着て、へばりつくようにして歩いていた土方巽に、ある種の非常に底深い嫉妬のようなものを看てとったのでしょうね。そうした遭遇というかな、舞踏の身体と、それから一九六八年、その火の塊のような、新宿と神宮とね、そういう記憶の出来方を、エロティシズムとともに思い出すんですね。

ぼくはどっちかっというと、女の子を誘って一緒に行くようなタイプじゃないんですよ。それなのに、こうした遭遇と記憶の混乱が起きている。これは間違いなく、語ることの不可能な、……、おそらくエロティシズムなんて言ってはいけない、そういうものを起こすほどの、途方もない未知の力の衝撃、……というよりも事故ともいえるような出来事でした。それをいま、導火線を引いていただいたので、森下さんのお話とともに、呼び出すことができました。

森下　私は実はその日本青年館の公演の『肉体の叛乱』を見ていないのです。翌年、東京に出てきました。ただ、日本青年館そのものの成り立ちが特殊なところなので、非常にいかめしいというか、そういう場所を土方は敢えて選んだことは確かです。しかし、それは元々、『肉体の叛乱』ではなく、『土方巽と日本人』というタイトルだったからなんですね。そのタイトルでつくってきて、公演の前に澁澤龍彦さんと

対談して、それから富岡多恵子さんのインタビューを受けて、そういった際に、「これから自分は日本人論をやるんだ」と言ったところだったのです。でも、実際の舞台はそうならなくて、結局は種村季弘さんが書かれた「肉体の叛乱（反乱）」という文章に引きずられたんですね。

元々は六月にやる予定が十月までずれ込んだ。『土方巽と日本人』ができなくて、『肉体の叛乱』になってしまったという恨みもあるんですね。それでも、もちろん土方は満足したとも思います。あれだけの舞台ですので、例えば室伏鴻さんとビショップ山田さんなんかは、それを見て土方の舞踏の世界に来て舞踏家になるんですから、非常にインパクトのある素晴らしい舞台であったことは確かです。満員の観衆も歓声をあげて見たんだと思います。それは映像を見てもわかりますけども、本来の「土方巽と日本人」というものは、達成できなかったということは確かです。土方にとってどうだったのか、私はずっと考え続けているんです。

吉増　時系列的に、その一九六八年という、その年の、……途方もない時代そのものが持っていた、都市が瓦解する炎みたいなものの一角は、さっきのお話で触れることができました。

その時代の中心的な雑誌が、この（雑誌を手にして……）『現代詩手帖』でした。表紙をご覧になってわかるように、この絵はさっきお話があった中村宏さんの作品ですよね。本文イラストが赤瀬川原平さん。そしてこの一九六九年十月号で天沢退二郎、金井美恵子さんとぼくは鼎談をしていて、同じ号に土方さんが書いている、吉岡実が書いている、白石かずこさんが書いているのです。

この雑誌を編集したのが、東大を出てすぐの桑原茂夫なんですよ。最も苛烈な魂を編集にぶつけた桑原茂夫が、奥付では編集人は八木忠栄になっているけれども、実質は、ぼくの記憶ではこのときからもうす

でに桑原だった。次の七〇年から真っ黒い表紙になりますけどね。ここで、時代の生々しい、火の出るような廃墟性みたいなものをジャーナリズムで引っ張ったのが、桑原茂夫なんです。その桑原茂夫がこの雑誌を辞めざるをえないときが直後にきた。いま久しぶりに誌面を見たら、金井美恵子さんと天沢退二郎に向かって、学園紛争なんかを話しながら、「舞踏についてどうなんですか、特権的肉体、舞踏家について」と編集部が介在してきている、これが桑原茂夫でした。

ここにはもちろん唐十郎も絡んでくる。鈴木忠志も絡んでくる。白石加代子も絡んでくる。このころ中心にいるのは土方巽、中嶋夏、笠井叡。しかもその笠井叡という人は、ある種の天才的な文筆家ですからね。しかも吉岡実（詩人）さんが最もかわいがった、三島さんもそうだったけども、そういうことはそばにいてヒリヒリとぼくらにもわかるわけです。そのヒリヒリとした空気の中で、この『現代詩手帖』を中心に、新宿の瓦礫が火を噴くような傾く状態を、演出とまで言わないけども露呈させたのが、この桑原茂夫という編集者でした。

従って、この人に依頼され、連れていかれ、会わされる人たち。この人から土方さんの声も聴こえてくる、吉岡さんの声も聴こえてくる。あるいは直接、吉岡さんの声を聴くようになる。そういう状態の日々が一九六八年、六九年、七〇年とありました。そこからしばらく時間差があって、大野一雄さんと関わる「時」がくるのです。

このときの『現代詩手帖』の鼎談は、「肉体と言語活動をめぐって」だけど、ぼくは初めての東南アジア旅行から帰ってきて、そのことをしゃべっているんです。それが、だんだんだんだん、「土方さんや笠井さんの真似をして踊っている」なんていうぼくの発言から、学園闘争の激しさ、そして唐十郎さんの話、

そういうほうへ移行していって、最後は舞踏論みたいなところへいくんですよね。

だから、記事だけを取り出して、書いたものを取り出してということでは伝えられなくて、この雑誌の存在、そして同時にあった生きている空気。その中にあった最も中心的な苛烈なものが「舞踏」であった、肉体言語であった。まずはそういうふうにとらえないといけない気がします。

森下　この二号続けて同じタイトル「肉体と言語」のテーマでやる、特集を組むというのは、雑誌としても珍しいと思うんです。ここに金井美恵子さんの「肉体論」というのが出てきて、みなさん驚いたと思います。土方は前の号で笠井さんに『肉体の叛乱』を批判されたんですけど、普通だったら翌号に自分の文章を載せるということは、そこで『肉体の叛乱』について何か触れるだろうと、期待していいかもしれません。でも土方は一切、触れていない。知らんぷりしているんです。それも面白いですね。これで笠井と土方が仲たがいしたわけでもないんです。だからそのあたりも含めて、本人に一回訊くべきだった、まあ、訊いても言わないかもしれないですけど、面白いですね。おっしゃるようにこの時代、舞踏というものがどうあったのかということの一つのヒントになるかもしれない。雑誌に取り上げられて、批判されながらも、それを無視するかのような文章を執筆し、でも二人は仲たがいしたわけではない。

笠井さんは一九七〇年の『骨餓身峠死人葛（ほねがみとうげほとけかずら）』のときに、土方の舞台を見て楽屋に行って、「土方さん、もう帰りましょう」って言ったという。「この舞台、やっちゃだめだ」って言ったっていうんですね。それも、笠井さんが言っていて、どこまで正確かと思うこともあるんですけども、そういったことはあったと思うんです。だから、この時代の笠井さんと土方のかかわりを考えるのも非常に面白い。

吉増　『骨餓身峠死人葛』は何年ですか。

森下　七〇年です。十月から翌年一月。

吉増　そこにもう一度、さっきの劇場への足取りとつなげて言いますけども、ぼくもその野坂昭如さんの原作を使った『骨餓身峠…』をとても印象深く見ていますし、文章も書いています。

あの場所（アートシアター新宿文化）、あれが後年、連続シリーズ（四季のための二十七晩）の場所になるわけですよね。したがって、日本青年館へ外苑前から歩いていく道、そして土方さんが着流しを着て、壁にへばりついていた新宿の裏道の厚生年金への道、そしてアートシアター新宿文化へ通う道。これが三つ揃うと、あの時代の東京というよりも、あの三つが浮遊する劇場が大きな瓦礫みたいにして浮かんでくる。そういう時代だったのです。

『人形劇精霊棚』という舞台

吉増　いま思い出しましたのですが、……、その苛烈な雑誌、『現代詩手帖』で、唐さんや「舞踏」を中心に、とうとうその塊をつくるのに成功した桑原茂夫が、思潮社をやめて、自分で劇場を作り上げるようなことをしたのです。それが、「パルコ」（池袋）というデパートが始まったときでした。アメリカから帰ってきたばかりのぼくに朗読をさせて、中嶋夏を呼んできて、矢野英征を呼んできて、そして翠川敬基、藤川義明を音楽、そして林静一の美術でもって、連続舞台公演『人形劇精霊棚』（一九七二年）をうったこと。これが桑原茂夫なんです。

そのときのことをはっきりと覚えています。アートシアター新宿文化でそのときに公演をされていた土方さんが、それを非常に気にされて、ある種の殴り込みに近い緊迫したときがありました。したがって、

ぼくの言いたいのは、この桑原茂夫という『現代詩手帖』の一番苛烈な、紙の中に劇場を作り上げた男が、今度はある、劇場といってはいけないなあ、ある一角に、火を噴くような肉体言語の場所をつくろうとした。

その苛烈なものは、もしかすると鈴木忠志さんの劇場運動も少しは背景としてあるか、寺山修司さんの天井桟敷も、あるいは唐さんの劇場もあるかと思うけれども、その劇場への道筋と、わたくしのした経験からいうと、六八、六九、七〇、七一というこのドシン、ドシン、ドシンというこの肉体言語のステップは、土方の日本青年館から始まって、パルコにまで続いていきます。そこにわたくしも自分自身の肉体を担いで、片棒を担いでしまった。したがって、それ以後、ぼくは大野一雄さんとも会うし、ある活動を続けるんだけども、非常に語りづらい、書くとか語ることのできないような時間が、そのあとにやってきている。それがわかりますよね。六八、六九、七〇、七一と。それをようやくいま語りはじめることができている、……というのか、それが口を開くのに、五十年近くが必要であったということです。

そのあと、もちろん大駱駝艦が始まって、室伏鴻がやってきて、「なんかやろうや」とか、あるいは京都の白虎社の大須賀勇が来てとか、そういうことはあります。ありますけれども、とにかく燃えたままの隕石がぶつかっていたような日本青年館。三島さんもぶっとんだろうなあ。瀧口さんと三島さんが並んで見ていた笠井叡ですからねえ、あの厚生年金小ホール。その二年後には三島さんが腹切るわけですからね。

そういう爆裂弾よりも激しかったことから、ぼくが土方の舞踏についての文章で、「廃星」という言葉を使った意味もあるんだな。隕石が燃えたまま新宿の裏町へ落下してきたんですよ。あるいは日本青年館へ。「舞踏」とかって、後からモダンダンスとの違いとか、技術的なことなどを言うけども、そんなもん

〈プロフィール〉

吉増剛造（よします・ごうぞう）

1939年東京阿佐ヶ谷に生まれ、福生市で育つ。詩人。詩の朗読パフォーマンスの先駆者としても知られ、国内外で朗読ライブを行う。パノラマカメラや多重露光による写真、銅板を用いたオブジェ、映像作品など多様な表現活動を展開。慶應義塾大学、早稲田大学、多摩美術大学、サンパウロ大学など国内外の大学で教鞭をとる。妻は歌手 *Marilya*。

【主な著作】

『黄金詩篇』（高見順賞）、『熱風 a thousand steps』（藤村記念歴程賞）、『オシリス、石ノ神』（現代詩花椿賞）、『螺旋歌』（詩歌文学館賞）。『「雪の島」あるいは「エミリーの幽霊」』（芸術選奨文部大臣賞）、『表紙』（毎日芸術賞）、2015年、日本芸術院賞・恩賜賞。他に『王國』、『わが悪魔祓い』、『青空』、『花火の家の入口で』、『The Other Voice』、『裸のメモ』、『怪物君』、『キセキ *-gozoCiné*』、『GOZOノート』（全3巻）の著作等がある。

舞踏言語——ちいさな廃星、昔恒星が一つ来て、
幽かに〝御晩です〟と語り初めて、消えた

2018年5月15日　初版第1刷印刷
2018年5月25日　初版第1刷発行

著　者　吉増剛造
発行人　森下紀夫
発行所　論 創 社
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-23　北井ビル2F
TEL : 03-3264-5254　FAX : 03-3264-5232　振替口座　00160-1-155266
装幀／服部一成
印刷・製本／中央精版印刷
組版／フレックスアート
ISBN978-4-8460-1668-5
© Gozo Yoshimasu 2018, printed in Japan
落丁・乱丁本はお取り替えいたします。